

## まえがき

北方森林学会大会の総会および研究発表会は、本年も11月12日に札幌コンベンションセンターにおいて開催された。総会では、来賓として一般社団法人日本森林学会会長の井出雄二氏と一般社団法人日本森林技術協会理事長の加藤鐵夫氏のお二人を迎えて祝辞を賜った。

そののち、議事として会則改訂及び各種規定の制定、平成26年度事業計画ならびに予算案についてはかり、いずれも承認された。また平成25年度事業報告では、会員現況、平成24年11月13日開催の第61回大会、春季行事、北方森林研究第61号の発行、講演会支援事業、国立情報学研究所電子図書への学会誌提供について報告され、会計報告ならびに監査報告が行われた。

引き続き、シンポジウム「これからの北海道林業の考え方ー林業イノベーション研究会からの提言ー」が開催された。北海道大学の渋谷正人氏には「林業イノベーションの必要性」、北海道立総合研究機構の滝谷美香氏には「カラマツ、トドマツ人口林施業の低コスト化に向けた植栽、育林方法」、森林総合研究所北海道支所の佐々木尚三氏には「北海道に適した伐採作業システムとそれを考慮した再造林植栽仕様」、森林総合研究所の宇都木玄氏には「北海道に適した低コスト造林の考え方」について、それぞれご講演いただいた。

林業の現状と問題点からイノベーションの重要性が提案され、その方策として異なる植栽様式や施業方法において主伐期までにかかるコスト計算が紹介され、機械化短幹集材システムによる植栽仕様と生産性の検討結果が報告され、最後に北海道に広がる緩中傾斜地を生かした伐採・造材作業と低コスト化造林に寄与する技術について提案された。そののち、渋谷氏の司会により会場との質疑応答にはいったが、現実問題に立脚した林業イノベーションについて活発な議論が行われた。

ポスター研究発表については、経営が5題、森林技術が2題、造林が21題、林政が1題、防災が3題、保護が2題、利用が1題、立地が5題の計40題となった。また、口頭発表は、林政が2題、経営、造林、立地、防災がそれぞれ1題の計6題となった。今年度の総発表件数46題は、昨年度の57題、一昨年度の59題に比べて、大きく減少したと言える。しかし、その中身はレベルの高い研究ばかりであった。これらの発表のうち、査読を経て、北方森林研究第62号に論文として掲載されたものは26題であった。

すべての研究発表の終了後に厳正な審査が行われ、第62回北方森林学会大会の学生ポスター賞および技術賞が選ばれた。技術賞には、東京大学北海道演習林の遠國正樹・尾張敏章・平田雅和・鈴木祐紀・高橋功一・笠原久臣・芝野博文氏による「森林内におけ

るハンディGNSS受信機の測位精度－冬季と夏季の比較－」、および北海道森林管理局森林技術・支援センターの南達彦氏、森林総合研究所北海道支所の佐々木尚三による「コンテナ苗植栽試験について－北海道でのコンテナ苗成長状況の考察－」が選ばれた。

また、学生ポスター賞には、北海道大学大学院農学院の佐久間彬氏、東京農工大学大学院農学研究院の渡辺誠氏、弟子屈町の若松歩・小林史和・川井田東吾氏、北海道大学大学院農学研究院の斉藤秀之・小池孝良氏による「摩周湖外輪山ダケカンバ衰退木の葉の水分特性と土壌特性」、および北海道大学大学院農学院の及川聞多氏、岩手大学農学部の松木佐和子氏、東京農工大学大学院農学研究院の渡辺誠氏、北海道大学大学院農学研究院の小池孝良氏による「開放系大気CO<sub>2</sub>増加施設に植栽されたカンパ類の葉の虫害と被食防衛能」が選ばれた。

いずれの研究発表も北海道を代表する素晴らしい研究成果であり、大会終了後に表彰式が開催され、これら4課題に賞状が授与された。

2014年2月

北方森林学会  
会長 丸谷知己

#### 第62号 編集委員会

編集委員長	丸谷 知己 (北大院農)	
編集委員	阿部 友幸 (道総研林試)	上村 章 (森林総研北海道)
	大野 泰之 (道総研林試)	韓 慶民 (森林総研北海道)
	来田 和人 (道総研林試)	今 博計 (道総研林試)
	酒井 明香 (道総研林試)	佐々木尚三 (森林総研北海道)
	対馬 俊之 (道総研林試)	津田 高明 (道総研林試)
	寺田 文子 (道総研林試)	鳥田 宏行 (道総研林試)
	中川 昌彦 (道総研林試)	長坂 晶子 (道総研林試)
	中田 圭亮 (道総研林試)	原山 尚徳 (森林総研北海道)
	福地 稔 (道総研林試)	八坂 通泰 (道総研林試)
	山口 岳広 (森林総研北海道)	山田 健四 (道総研林試)
事務局	原 秀穂 (道総研林試)	福地 稔 (道総研林試)